

# 「出雲神話の世界」

～ 古事記と出雲王国 ～

2025. 7. 24

AYSA西部部会  
ASD

☆古事記 和銅5年(712)完成  
40代 天武天皇(673～686) 編纂を命令 稗田阿礼(舎人)  
持統、文武天皇でも完成せず  
30数年後 第43代 元明天皇(女帝) 新たに 太安万侶加わる  
上中下 3巻 音訓を使い分けた日本語  
古事記には321柱の神様が登場 ⇒いちいち覚えられるか？

- ・完成しても長く宮中に秘され公表されず、原本は存在せず
- ・江戸中期、本居宣長が諸写本を校正し、44巻に纏めた。「古事記伝」

☆日本書紀 養老4年{720年}完成 舎人親王編纂  
・全30巻、神代から持統天皇までの日本の歴史を記述  
・漢文で記述、外国向けを意図している  
・古事記と内容が異なるところ多数ある

# 古事記のあらすじ(Wikipediaより)

上巻(かみゆまき):天地開闢から日本列島の形成と国土の整備が語られ、天孫降臨を経てイワフレヒコ(神武天皇)の誕生まで記す。所謂「日本神話」 出雲に関連が3分の1

1)天地開闢:天と地が開かれて、新たに神々が誕生

## ①造化三神

- ・天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ):天地開闢の際に最初に現れたとされる神で、高天原を統治します。
- ・高御産巣日神(タカミムスビノカミ):生成発展を司るとされます。
- ・神産巣日神(カミムスビノカミ):生成発展を司るとされます。

## ②次いで、二柱を加わった「別天神」(コトアマツカミ)

- ・宇摩志阿斯訶備比古遯神(ウマシアシカビヒコヂ):葦の芽のように現れた神で、生命力や成長を象徴します。
- ・天之常立神(アメノトコタチ):永遠不変の存在とされる神です。

2)その後に七代の神(神世七代(かみよななよ、12柱)が誕生。その最後にイザナギ、イザナミが生まれた。

【一代】国之常立神(クニノトコタチノカミ):国土が定まる時に現れた神。

【二代】豊雲野神(トヨグモヌノカミ):雲の覆う野の神

【三代】宇比地邇神(ウヒヂニノカミ)・須比智邇神(スヒヂニノカミ):土地の神

【四代】角杙神(ツヌグイノカミ)・活杙神(イクグイノカミ):土地の境界を表す神

【五代】意富斗能地神(オオトノヂノカミ)・大斗乃弁神(オオトノベノカミ):住む家の門口を守る神

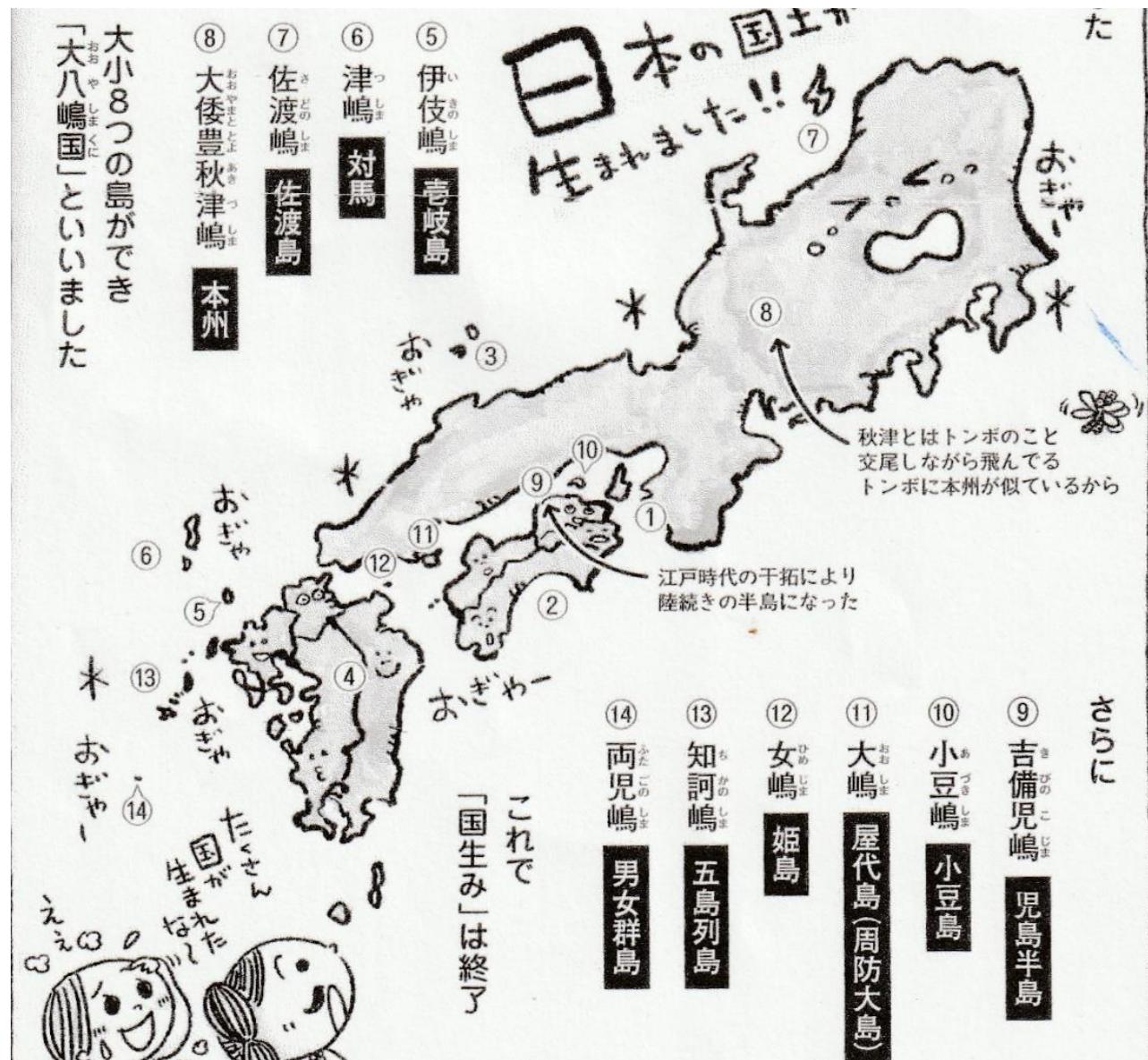
【六代】淤母陀琉神(オモダルノカミ)・阿夜訶志古泥神アヤカシコネノカミ):住む家の門口を守る神

【七代】伊邪那岐神(イザナギノカミ)・伊邪那美神(イザナミノカミ)

3) 二神は高天原(天)から葦原中津国(地上世界)に降り、結婚して結ばれ、その子として、大八島国を産む。

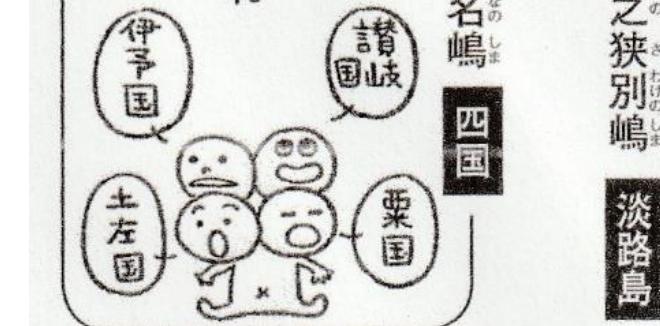
出典: ふわこういちひろう著「まんが古事記」

今度は立派な島が次々と生まれまし



四百九

次に②伊予之二名



せし  
て

胴体が1つで  
顔が4つある  
顔にはそれぞれ  
名前がある



- 4)ついで、山の神、海の神など様々な神を産んだ。
- 5)こうした国産みの途中、イザナミは火の神を産んだため、火傷を負い死んでしまい、出雲国と伯耆国との境にある比婆山(現・島根県安来市)に葬られた。
- 6)イザナギはイザナミを恋しがり、黄泉の国(死者の世界)を訪れ連れ戻そうと説得する。イザナミは待ってくれと言い、また中を見てはいけないと約束する。しかし、約束を破って見ると腐乱死体。イザナミは、怒ってイザナギを追いかけ、やっとの思いで黄泉の国を脱出し、黄泉比良坂を巨石で塞いだ。

二人は岩を挟んでののしり合う

　イザナミ「愛しい夫よ！こんなことをするなら、あんたの国の人を毎日千人殺してやる」

　イザナギ「愛しい妻よ！私は毎日千五百人の子どもを産ませて、千五百の産屋を建てるぞ!!」

7)イザナギは黄泉の国の穢れを落とすため、禊を行った。身につけたものから多数の神々が生まれた。

8)最後に顔を洗った。左目を洗ったときに天照大御神(アマテラスオオミカミ)、右目を洗ったときに月読命(ツクヨミノミコト)、鼻を洗ったときに須佐之男命(スサノオノミコト)を産む。

その後、淡路島の幽宮で過ごした。これら三神は三貴子と呼ばれ、神々の中で重要な位置を占めるが、月読命に関してはその誕生後の記述が一切ない。

- 9)スサノオノミコトは乱暴者なため、姉のアマテラスに反逆を疑われる。そこで、アマテラスとスサノオノミコトは心の潔白を調べる誓約(うけい)を行い五男三女神(八王子神社の神)が誕生する。
- 10)その結果、スサノオノミコトは潔白を証明するが、調子に乗って暴れてまくります。
- ・田畠を壊し、溝を埋め、神聖なる御殿に大便をまき散らす。
  - ・乱行はさらにエスカレート、機織小屋の天井から皮をはいだ馬を落とし、驚いた機織女は気絶し、持っていた梭(おさ)が陰上(ほと)に突き刺さり死んでしまった。
- 11)アマテラスは、怒りを通り越して悲しみを抱え、天岩戸に閉じこもってしまう。高天原と葦原中国は真っ暗になってしまった。八百万の神々は、天安河の河原に集まり、会議を開き脱出計画を練る。そして、諸神の知恵で外に出すことに成功する

12)スサノオノミコトは神々の審判により高天原を追放され、葦原中津国の中出雲国に下る。ここまで乱暴なだけだったスサノオの様相は変化し、英雄的なものとなって八岐大蛇退治を行なう。

## 皆さん、ご存知の話:

- ・肥河(斐伊川)の上流の鳥髪の地(船通山)に降ります。上流から箸が流れて来た。上流に行くと老夫婦(アシナヅチとテナヅチ)と娘のクシナダヒメが泣いていた。
- ・娘が8人いたが、毎年ヤマタノオロチがやって来て一人ずつ食べてしまう。今年ももうすぐやって来て、最後の娘を…
- ・猛者スサノオは、「俺、オロチを退治するから、娘を妻にチョウーダイ！」
- ・強い酒を8つの甕に用意した(オロチの頭の数分)。やがて、オロチがやって来て、酒を飲み始め直ぐに寝ました。
- ・スサノオは、十拳剣(とつかつるぎ)で切りつけ、バラバラに！尾から剣が出てきた。  
**「雨叢雲の剣」(草薙の剣、三種の神器、熱田神宮のご神体)⇒アマテラスに献上**
- ・スサノオは、英雄となり、クシナダと結婚し、須賀にやって来て宮殿を作った。  
めでたし めでたし!!

オロチを退治したスサノオは、自分の宮を造るのにふさわしい土地を求め、須賀にたどり着いた。この地が大いに気に入ったスサノオは、「我が御心すがすがし」といってここに須賀宮を造った(須賀神社:雲南市大東町須賀260)。



「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に 八重垣作る その八重垣を」  
「幾重にも雲が立つ出雲の国で、妻と住むための家を建てた。その家は、まるで幾重にも重なる雲のように立派な八重垣で囲まれている。」

出雲にはスサノオを祭神としている神社は、他にもある。

- ・須佐神社:(出雲市佐田町須佐)スサノオの御魂を祀る神社
- ・八重垣神社:松江市佐草町 旧称を佐久佐神社、

社伝によれば、須我神社を遷座

→詳細は次ページ

# 八重垣神社について

八重垣神社HPより

素盞鳴尊は、斐の川上から七里離れた佐草の郷“佐久佐女の森(奥の院)”に、大杉を中心に『八重垣』を造り、稻田姫を御隠しになりました。八岐大蛇を御退治になった素盞鳴尊は、ご両親の脚摩乳、手摩乳の御許しを得て夫婦となり、この佐草の地に宮造りされ、御夫婦の宮居とし縁結びの道をおひらきになられたのです。

## 奥の院 佐久佐女の森：

境内奥地の佐久佐女の森は、素盞鳴尊が八岐大蛇を御退治になる際、稻田姫を難からお救いになった場所です。森の大杉の周囲に「八重垣」を造り、稻田姫をお隠しになりました。

## 鏡の池：(縁結び占い)

稻田姫命が飲料水とし、また御姿をお写しになられた池と伝えられています。社務所で売られている薄い半紙の中央に、小銭を乗せて池に浮かべると、お告げの文字が浮かぶという手法。



# オロチ退治の考察

## ・自然災害の克服:

オロチは、斐伊川の氾濫など、人々に被害をもたらす自然災害を象徴している。オロチ退治は、脅威を克服し、人々が安全に生活できるようになったことを意味する。

## ・たら製鉄と政治的対立:

オロチ退治は、出雲地方のたら製鉄集団と大和朝廷との間の政治的・経済的な対立を反映しているという説もある。スサノオがオロチの尾から草薙剣を得るというエピソードは、製鉄技術の象徴であり、大和朝廷がその技術を手に入れたことを意味すると解釈。

## ・治水事業

オロチ退治は、斐伊川の治水事業を意味するとも解釈される。スサノオがオロチを退治した場所が、後に治水工事が行われた場所と関連付けられていることからも、この解釈が成り立つと考えられている。

## ・神話の多層的な意味:

オロチ退治は、これらの解釈以外にも、様々な意味を持つと考えられている。例えば、オロチは出雲大国の象徴で、アマテラスの弟のスサノオが征服し、草薙の剣を高天原に献上し、服従を誓ったと解釈する説。また、スサノオとクシナダの結婚は、新たな生命の誕生や豊穰を象徴しているとも解釈されている。

# 古代史における出雲大川(斐伊川)、神戸川(神門川)の影響



洪水が度々起つた。

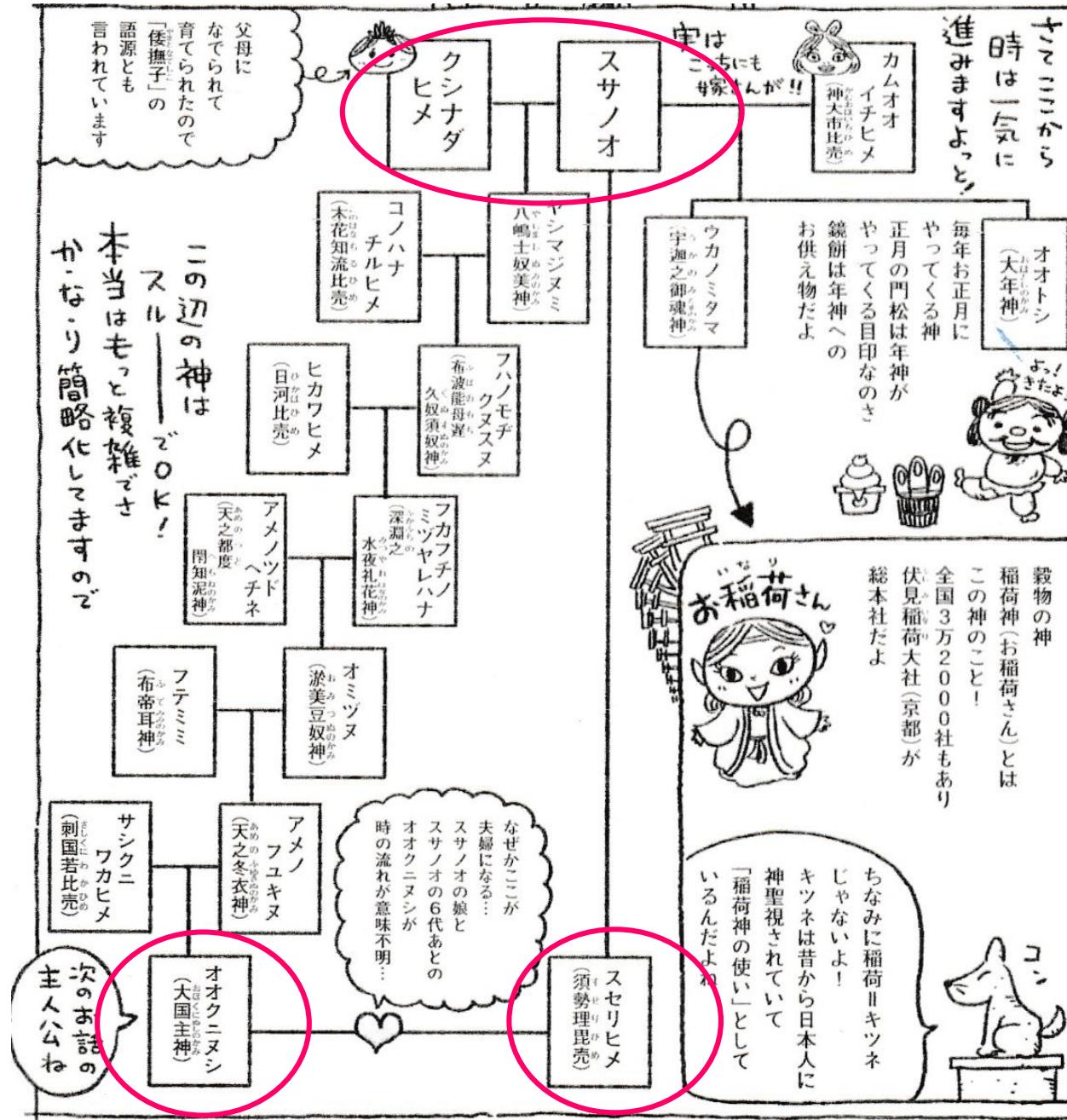
「鉄穴(かんな)流し」: 上流域では砂鉄を精錬して鉄を作る「たたら製鉄」が盛んで、その砂鉄採取のために山肌を削り土砂を川に流し、比重の違いで砂鉄分のみを採集

「木炭の大量生産」: 樹木の伐採による土砂流出



肥沃な土砂の堆積で出雲平野が形成  
稻作農業が栄え、豊かな出雲豪族が生まれた

時代は一足飛びにスサノオから六代目オオナム(大国主命)の話へ



# 古事記では時間背景がいい加減

例えば、オオクニヌシがスサノオの娘と夫婦

(スセリヒメ)

⇒この父娘は国造りで再登場

出典: ふわこういちひろう著「まんが古事記」

# 13)オオナムチ(後の大国主神)の苦難と初恋と試練

## その1 稲羽之素兎(因幡の白兎)

- ・オオナムチには異母兄弟がいた(八十神)。彼らは因幡の八上比売(ヤカミヒメ)に妻問い合わせ(求婚)するため出雲を発つ
- ・気多(けた)の岬に来た時、皮を剥がれた赤裸の兎を発見
- ・兎は鮫を欺いて海上に並ばせ、隱岐の島から因幡に渡るが、口をすべらせ欺いたことがばれて皮を剥がれてしまう
- ・それを見た八十神は、「海水に漬かって、風あたり、高い山で寝ていれば治る」教える。
- ・兎の肌は腫れあがり苦しんでいたが、そこへオオナムチが来て、「真水で洗って蒲の穂に包んで休めば治る」と
- ・助かった兎は、妻問い合わせはオオナムチが成し遂げると予言する
- ・これを知った八十神は、嫉妬に狂って様々な謀略を仕掛け、最後には猪に似せた赤い焼石に押し潰されて死んでしまう
- ・これを知った母神が高天原の神に頼んで生き返らせたが、八十神が命を狙うので、「スサノオのいる根の堅州国(かたすくに)へ行きなさい」と勧める

## その2 スセリヒメ(須勢理毘売)との恋

- ・オオナムチは、根の国へ降りて行った。そこに宮殿があり、スサノオの娘スセリヒメが現れる。……ッ、目を合せた瞬間、ビビッと！ さすが色男
- ・宮殿から出てきたスサノオは、曾々・孫のオオナムチが婿に相応しいか？ 嫌がらせを兼ねて勇気を試す
  - ①蛇のいる寝室、②火を放って焼き殺そうとする、
  - ③自分の頭髪の中の虱(実は百足)を捕って食べろ⇒刺されて死ぬ
- ・スセリヒメがまた助ける。このままで殺されると、二人は脱出を決心する
- ・スサノオが寝た隙に、髪を柱に括りつけ、琴と弓(神事に使うもの)をもって逃げた。
- ・ところが途中で琴が木の枝に触れて大きな音を発てる。目覚めたスサノオは後を追つて追いつく。しかし、二人の愛と勇気を認めて許し、次のように命令する

「わしから奪った剣と弓矢で八十神を倒し、葦原中国を治め、大国主神と名乗り、  
スセリヒメを妻として宇駄山の麓に高天原に届くほどの高い宮殿を建てて住め」
- ・そこへ先に登場した因幡のヤカミヒメがやって来て、正妻争いを繰り広げる。嫌気がさしたヤカミヒメは因幡に帰る
- ・ここから、大国主神の国造り、否、子づくりが始まる。

## 14) 国土が整うと「国譲り」の神話に移る

豊葦原の瑞穂の国の繁栄を高天原で見ていたアマテラスは  
「わが子孫が治めるべきだ」と宣言し、次々と息子たちを遣わす

- ①アメノオシホミミ: 天浮橋から下を見て、引き返してしまう
- ②アメノホヒノを遣わしたが、3年経っても目的を果たせず、大国主に懐柔され、安楽な生活にひたっていた。
- ③アメノワカヒコ(二枚目で弓の名手)を遣わすが、大国主の娘シタテルヒメに一目惚れし結婚、8年報告なし
- ④次に、雉のナナキメを使いに出し説得させたが、逆にアメノワカヒコの矢に射貫かれ高天原まで飛び帰り、跳ね返った矢で自らも死んだ
- ⑤最後の手段として剣の神アメノオハバリに相談し、息子タケミカヅチ(雷神)とアメノトリフネ(鳥のように速く走る船の神)を派遣することとなった。

## 14)「国譲り」のクライマックス：稻佐の浜

- ⑥2人は出雲国の稻佐の浜に降り立った。タケミカヅチは十拳剣を砂浜に立て、その剣先に胡坐をかいて、曰く  
「天照大臣が仰せである。この国は大御神が統治すべき国、如何に？」
- ⑦オオクニヌシは「年老いた私は決められない。息子のコトシロヌシに聞いてくれ」 稲佐は「諾否(いなせ)」の変化したものとの謂れ
- ⑧アメノトリフネはすぐにコトシロヌシを見つけ出し、浜に連れてくる。そして  
「この国は大御神に差し上げたらいいいでしょう」とあっさり認めた
- ⑨タケミカヅチは「他に意見を言うものはいるか？」オオクニヌシは「もう一人息子のタケミナカタいます」
- ⑩一部始終を見ていたタケミナカタが大きな岩を手にして現れる。二人は力比べをするが、タケミナカタは諏訪湖まで投げ飛ばされた。命乞いをし、「私は諏訪から離れません。出雲の国は大御神の御子に上げます」

# 出雲大社は古代の高層建築だったか？

1) 出雲大社は何時できたか？

- ①国譲り神話の後、アマテラスがオオクニヌシのために造った
- ②出雲風土記：杵築大社。杵築郷の項に、ヤツカミズオミヅヌ命の国引きの後、オオクニヌシのために諸々の神たちが宮廻に集まって造った

2) 高さはどれだけあったのか？

- ①現在：8丈（約24m）1744年造営
- ②中古：16丈（48m）、上古：32丈（96m）説がある

3) 歴史的根拠

- ①「口遊（くちずさみ）970」：雲太・和二・京三。  
和：東大寺大仏殿；15丈、京：平安京太極殿
- ②千家国造家「金輪御造営差図」（3本の柱を束ねる金輪）
- ③2000年の発掘：宇豆柱と共に心柱とその配置と朱塗（ベンガラ）  
柱の年代測定：1215～1240年⇒宇治2年（1248）造営遺構

4) 古代の地形：神門水海、入海は大きく、海人たちの航海の目印？

## 「国譲り」以降の古事記

- 17)葦原中津国の統治権を得ると高天原の神々は天孫ニニギを日向の高千穂に降臨させる。
- 18)次に、ニニギの子供の山幸彦と海幸彦の説話となり、海神の宮殿の訪問や異族の服属の由来などが語られる。山幸彦は海神の娘と結婚し、誕生した息子もまた海神の娘と結婚し、孫の神武天皇が誕生して上巻は終わる。

## 中巻(なかつまき)：

1)初代神武天皇から15代応神天皇までを記す。

☆神武東征：神倭伊波礼毘古命(カムヤマトイワレビコ、神武天皇の古事記での呼称、磐余彦命(イワレビコノミコト(日本書紀))は、兄の五瀬命(イツセ)とともに、日向(現・宮崎神宮)で、葦原中国を治めるにはどこへ行くのが適当か相談し、東へ行くことにし、日向を出発、豊前、吉備等を経て紀伊、熊野から大和に入り、白橿原宮で即位した(紀元前660年2月11日)

2)2代から9代までは欠史八代と呼ばれ、系譜などの記述のみで、説話などは記載が少ない。そのため、この八代は後世に追加された架空の存在であるという説がある。

3)神武東征に始まり、ヤマトタケルや神功皇后について記す。

☆倭建命は12代景行天皇の双子の弟(小碓命、オウスノミコト)：熊曾、出雲、尾張および関東、東北地域を平定した英雄

☆神功皇后は、14代仲哀天皇の皇后。建内宿祢と新羅、百濟を制圧。

## 下巻(しもつまき)

1)16代仁徳天皇から33代推古天皇までを記す。

2)仁徳天皇:

☆応神天皇崩御後、互いに皇位を譲り合った弟が自殺、空位3年を経て即位したと伝えられる。河内王権の初代とする説も根強い。常に庶民の暮らし向きに心を配り、税や使役を軽減した仁王として描かれている。女好きで有名、皇后の嫉妬に苦しんだこと。

3)21代雄略天皇:史上最も残虐な天皇として知られる(異母兄二人、眉輪王(マヨワノオオキミ、20代安康天皇を殺害)を焼き殺し、また履中天皇の皇子二人など政敵を一掃。

4)推古天皇:初の女帝。蘇我馬子(叔父)や聖徳太子(甥)によって支えられ、冠位12階や憲法17条など、天皇中心の国家を作った。また、遣隋使を派遣し、隋に学び政治に反映させた。

# 出雲王国は存在したか？(古代史の謎)

長い間、国学者、歴史学者、考古学者は、「出雲王国は虚構だ！」としてきたが、近年の調査・研究でその存在が実像に変わりつつある

- 1) 古事記、日本書紀は、大和朝廷の出雲神話は、大和朝廷が正当性を主張するために編纂され、当時の政治的意図が反映されている。
- 2) 大和朝廷が統一する以前は、各地に有力な勢力(豪族)が存在していた。
- 3) 「国譲り神話」や古事記だけでなく、日本書紀や「出雲国造神賀詞(出雲国造が天皇に奏上する壽詞)、8世紀」にも見られる
- 4) 古事記の上巻の1/3を占める程、無視できない存在だったことが伺える。
- 5) 各地で遺跡が発見された
  - ①荒神谷遺跡(出雲市)1984年、358本の銅剣
  - ②加茂岩倉遺跡(雲南市)1996年、39口の銅鐸
  - ③神原神社古墳(雲南市)邪馬台国の女王卑弥呼が魏より授かった鏡のうちの一枚とされる

# 出雲王国は存在したか？(古代史の謎)

6) 古代出雲勢力を支えたのは日本海沿岸交易だった

- ① 近年、古代出雲研究で交易に関する分野が注目されている
- ② 大陸との交易の拠点は、北九州が主であったが、出雲は山陰以東と大陸、北九州を結ぶ中継地だったと見られている。
  - ・山持遺跡(出雲市、出雲平野の北端)朝鮮半島製土器が大量出土
  - ・オオクニヌシが越(北陸)の姫を妻とした記述(古事記)
  - ・糸魚川のヒスイを交易品とした
  - ・青谷上寺地遺跡の発掘: 1998年、ラグーンに港を築く。  
2世紀頃の100人以上の人骨出土。渡来系(中国系)
  - ・神門水海は大きな入り江であり、大社の宮殿近くまで迫っていた

7) 出雲大社を祀ってきたのは、大国主神一族？

オオクニヌシの願いを聞き壮大な神殿を建て、息子アメノホヒを仕えさせた。(その子孫は、代々出雲国造として大社に奉仕し、中世以降は千家・北島両家分かれた)

8) 出雲は大和朝廷にとって無視できない勢力であったことは間違いない

おわりに：

高校の日本史の授業で、1人1テーマを選んで発表する時間があった。私は、大国主命を取り上げたが、日本史は受験科目から外したので、ノルマ消火に終わって、ほとんど記憶に残っていない。

今回このテーマを選んだのは、娘婿の書棚にあった「まんが古事記」、「『古事記』75の神社と神様の物語」が眼にとまり、手に取ってみると「出雲神話」が満載。早速、図書館(宇部と小倉)で関連書を借りて調べると面白い……

ところが、謎が多く、諸説満載で解き明かすのには能力不足、消化不良で時間切れ！

その上、後から学校行事が割り込んで…

御免なさい